

落合陽一氏の講演「人生 100 年時代を生きる」のレポート

2019/6/16 神谷明彦

最近、大学院で学んで（あるいは途中で）起業する人が増えた。大学を出て企業にしばらく勤めてスキルを身につけてベンチャーを起業する人もいる。この場合、企業が大学院のような役割をしている。リカレントという言葉があるように多様なキャリアパスが考えられるようになった。

新たな技術を早く実用化するには、大学等での速いプロトタイプ化と企業などでの速い社会実装が必要だが、日本で何か変わった社会実験をしようにも、規制が多くてできない。「法整備」と「技術開発」と「皆のスローガン（合意形成、ムードづくり）」を同時に行わないといけない。

国の作った資料に、「とがった人の活躍」「クールジャパン」「オープンイノベーション」とかもっともな言葉がちりばめてあるが、こういうのを私は「霞ヶ関曼荼羅」と呼んでいる。

私はこれまで、大学教員×政府の会議メンバー×会社経営をしていて、これらをやっている人間にしかわからないような話しをしていた。それではわからないと言うことで、「[0 歳から 100 歳まで学び続けなければならない時代を生きる 学ぶ人と育てる人のための教科書](#)」という本を書いた。

メカでできた機械は分解すればわかったが、コンピュータのソースコードはバラしてもわからない。アマゾンのサーバーでどんな処理が行われているかもわからない。ハッキングして見ようとすれば犯罪になる。

広告の秩序は電通・博報堂が仕切っているし、銀行は 20 世紀の象徴だった。でも、今では宣伝も決済も電子の世界で簡単にできる。お金の価値が相対的に下がる。

古典的なテコと言えば、力学テコだが、投資の分野ではレバレッジ、距離につれて変動が大きくなる光テコ、ビッグデータを AI で解析するようなデータテコが考えられる。

人間を計算資源とみなしてシステムに組み込む[ヒューマンコンピューテーション](#)、ゲームの要素を組み込んで動機を与える[ゲーミフィケーション](#)などの概念が考えられる。私は、人・モノ・自然・計算機・データが接続され脱構築された新しい自然環境？である[デジタルネイチャー](#)という概念を提唱している。

これまでは技術を使って物的インフラを蓄積してきたが、これからは非物的な価値づく

りが重要になっている。

ディープラーニングは二酸化炭素の発生も多く、決してエコではないと言われている。二本における仮想通貨のマイニングはデンマーク一国分の電力を使っている。情報機器が使う電力は侮れない。

100歳まで生きる時代になったが、60歳から100歳はあまり馬力を要する仕事はできない。30歳まではマルチメジャー（多専攻）で、Ph.D.やMBAを取ったりできる。自分の中に多様な対立する価値観を持っていると、世の中の趨勢が決まった後の対応が素早くできる。正解か不正解かではない。何が事実かも曖昧だ。

学校でプログラミング学習をするというが、実はみんなプログラミングは好きじゃない。プログラムが流通していれば自分でつくる必要はない。プログラミング教育を目的化してはいけないと思う。早くからプログラミングを学ぶよりは、数学ができる方が良い。

マックスウェーバーの時代に「魔術から科学へ」。1980年頃から、世界は「再魔術化」する。

コンピュータ技術はブラックボックス。理由はわからないが利用はできる。

揺れ動く価値観。アジャイルな教育へのシフト。

微生物による発酵はコストが安い。それと同じように、情報はデジタルリソース（インターネットやオープンソース）によって低コストで発酵する。（Digitally Fermenting）

テキサス州オースチンで開催された「[SXSW \(サウス・バイ・サウスウエスト\)](#)」では、市長の方針で電動スクーター（1台4万円程度）をまちじゅうに大量に配置した。3週間ほどの期間中に1回2ドルで使用するとしても、コスト的に見合うのではないか。新しいことを試行するには、テクノロジーとポリティクスが高度に対応しなければならない。

広く浅くでも、一つのモノを通貫して造ったことのあるヤツは強い。

JAに入らなければJAを立て直す必要はない。NHKに入らなければNHKを立て直す必要はないし、そんな役目は回ってこない。旧来のコミュニティに入らなくても、自分が理解・共感できる新しいコミュニティで活躍すれば良い。そんな若者を社会はもっと大切にすべきだ。若い人の価値をどうやって最大化するかが大事だ。

ある人気のユーチューバーの動画を幼児が喜んで見ている。これは一種の子守とも言える。未知のビジネスは無限にある。

人生は長いから、違ったことを経験する時間が20年～30年あっても良いと思う。